

「個の深み」を支援する新しい 社会教育の理念と技術(その2)

—出席ペーパーに表れたその実態と可能性—

西 村 美 東 士

今回の論文の位置づけ

前回の論文、「(その1)」では、まず、講義が主体的学習にとって有益ではありえないという関係方面における一般的な論調や、その論調のもとに行われた教育実践の経緯を紹介した上で批判した。次に、出席ペーパーを中心とする「話す・書く・表現する」という営みを誘発する契機を準備することによって、「反応・発展の個別化の促進」が期待できることを主張した。そして、本論のこれらの主張を支える社会的基盤・条件として、今後のネットワーク社会の形成の可能性と特質を挙げ、そこでは個人の主体性が一人ひとりに厳しく求められることを指摘した。

詳しくは「(その1)」のとおりであるが、いずれにせよ、前回および今回以降の本論のすべてを貫く鍵概念は、「個の深み」であり、問題意識は、その獲得を家族、友だち、教育者、職場、地域などの他者、とくに社会教育がいかにすれば支援できるのか、ということである。

今回は、出席ペーパーに表れた事例をいくつかの視点から分類して紹介することによって、「個の深み」の内容、またはその阻害要因に関する具体的な姿を明らかにしたい。そこでは、学習者一人ひとりの「個の深み」の獲得のプロセスとその支援の方法が、もっとも重要なテーマとなるだろう。

ただし、枚数の関係から、すべての事例を紹介するわけにはいかない。事例は、この論文の数倍の分量である。それについては、関心がある人には個人的に提供したい。また、出席ペーパーの中には、極端にプライベートな事例などもあり、そこにはその人だけの強烈な環境・体験に基づいた「個の深み」の萌芽が散見されるのだが、その場合は出席ペーパーがカウンセリングに近い作用を及ぼしていると考えられるので、残念ながら公開を控えた。

ちなみに、前回の論文で、枚数の関係から掲載を見送った1の(1)から(2)までについても、拙著『生涯学習か・く・ろ・ん—主体・情報・迷路を遊ぶ—』(1991年4月、学文社)の第1部にそれを含めて前回の論文の全文を掲載したので、ここでは割愛する。

なお、ここでいう「出席ペーパー」とは、講義を聴いている中で、関心をもったこと、感じたこと、関連して考えたこと、関連する情報の提供、それらの考察などを、口語体でもイラスト

ト入りでもよいから自由に書くもので、そのルールは、次に示すとおりである。(1)何を書いて
もかまわない。(2)テストではない。社会人の場合は匿名でもかまわない。(3)書くことを義務づ
けるものではない。(4)ペーパーは講義時間中に書く。書く時間はとくに指定しない。(5)ペー
パーは終了時に回収し、講義者が保管する。原則として返却しない。

また、ここに挙げた「T大2部」の学生は、おもに教育学部、社会学部の社会人入学者を含
む2部学生であり、「S短大」の学生は、音楽を専攻しながら教職や社会教育主事課程を学ぶ
短期大学学生である。

1 学生から教師へのストローク

ピア・コンセプトが働く中、皆の前で教師に注文を出すことは、かなり困難である。その点、
出席ペーパーなら、フィードバックが大いに可能である。しかし、じつは、それ以上に、学生
が教師に関心を持っている、という意思表示として、学生にとっても教師にとっても、この出
席ペーパーは有益なのである（この点については、前回の論文でも触れた）。

ストロークには、肯定的ストロークとともに否定的ストロークがあり、後者へのニーズは人
間存在の実存的な悲しさを物語るものだが、教育＝学習の交流の場においては、水平な関係に
基づく「批評的」ストロークというものが存在しようと考えたい。学生からの批評的ストロ
ークによって、教師は自己の存在確認をすることができる。また、学生は、依存的な学習態度を
自ら改めることができる。

1990. 5. 23. T大2部社会教育概論

（ビデオの）放映の途中、先生の話が少し耳につきます。イメージは画面から個々が描く
ものです。そこに話が入ると、そちらのイメージを描いてしまいます。

1990. 6. 27. T大2部社会教育概論

講義中、退席する人を、顔色ひとつ変えずに見送れる先生の心境はどのようなものなの
でしょうか。

1991. 1. 16. T大2部社会教育概論

あまりにも自由な授業で、（自分も含め）ルーズな態度の人も散見されましたが、むしろ、
意欲のある人にとってこそ、成果を上げている授業だと思われます。個人的には、今ひとつ、
大学の講義らしいとは思いませんでしたが、そんなステレオタイプな見方を打破する可能性
を秘めていると思います。もしかすると、先進的な授業なのかもしれません。

2 教師から学生へのストロークの反映

指導（指示的な）をするのならば、指導していることを教師の側がよく認識した上でせよ、

という。私は、それに加えて、教師からの率直なストロークとして指導することがありうると思う。

「こうしてはいけない」「ああしてはいけない」と教師が情性に任せて何度も言ったところで、そうできない理由のある本人にとっては疎外感を感じるだけである。それよりも、理屈からではなく、教師が自分の実存から発する心の呼びかけを学生に対して行うこと、すなわちそれをストロークと呼ぶのであろうが、それが指示的指導の受け入れられる条件の一つだと考えられる。

1990. 5. 16. T大2部社会教育概論

(出席ペーパーでの) 十人十色の考えに対して、先生がコメントしてくれるのですが、時間やレジメの紙の大きさなどによって、十分ではなく、また、中途半端になっていると思うのです。先生が“mito”のマークをつけてひとこと書いてくださいますが、違うんです。ひとことにまとめる前の部分を聞きたいのです。1人対120人、むずかしいですね。ちょっと考えてしまいました。

1991. 1. 16. T大2部社会教育概論

第1回の印象……何なの、この授業、いやなやつ(ごめんなさい)。今、25回分の講義資料を、もう一度じっくり見直したいという私に変容をきたしております。「教育とは、学習者が主体的に自己変容を図ることである」とするなら、このコースは、まずは成功ですね。

3 授業中の自己の体験の客観視

通常の講義内容のそれぞれの項目をどう受け止めたかということについても、出席ペーパーは学習者の自己確認にとって有効であるが、授業の内容が体験的学習である場合は、そのような「振り返り」がとりわけ必要である。体験が、自らの「振り返り」によって客観視され、自己の認知構造に取り込まれるからである。

1990. 6. 9. S短大教育社会学

こんなゲーム(銭回し)なんてやったの、中学校以来なかったと思う。だから、先生の言うドキドキした気持ちになったのは、とても久しぶりでうれしかった。それと、その反面、そういう気持ちになることが少なくなった今の自分がとても淋しく思えた。

1990. 6. 9. S短大社会教育概論

(リーダーシップ・トレーニングで) 自分で当ててみるということになると、ちょっと大げさかもしれませんが、勇気がいるんです。その勇気というのは、もしまちがっていたらみんなからなんて思われるのかな、みんなに悪いな、とか、別に私が当てなくても誰かが先に当ててくれるだろう、という気持ちをおさえて、自分で当ててということなのかな、と思い

ます。

1990. 4. 25. T大2部教育学演習

今日のバズ討議は、たんにアイデアを出し合うだけなのではなくて、その進め方や、その時のメンバーの気持ち、沈黙している時の気持ちなどを考えるためのしかけがあったのですね。こういうのは、なんだかワクワクします。

1991. 1. 23. T大2部教育学演習

グループでイベントを行った際、今までの自分でしたら、しっかりきっちり計画を立ててやらなくては何事も気がすまなかったのが、今回のこの経験では、非計画性を受容し、当日の全員の協力でうまくできた時（そう評価しているのだが）、喜びが大きく感じられた。

4 自己表現の不器用さと表現の解放

自己表現については、強い抵抗がある。どうしてこんなに拒絶感があるのか、他人としては理解に苦しむほどである。本人の生育歴の中で、自己表現が抑圧されたり、自己表現によって心を傷つけられた体験があるのかもしれない。

しかし、一方では、当然のことながら、その本人も自己を表現して他者とストロークを交換したいという欲求をかかえている。「個の深み」の発露のためには、本人の抵抗感を十分に配慮して安心感を与えた上で、潜在的な自己表現欲求を解放させなければならない。

たとえば、人前で喋るのは厭だけれども、教師だけが見る出席ペーパーになら安心して自己表現することができるという学生も多い（というより、そちらの方が多数派である）。そうであれば、書くことで自己表現するチャンスを豊かに提供すればよいのである。

また、専門的な芸術の高度な部分を除けば、日常生活、学業、生涯学習の中で必要になる自己表現については、慣れやテクニックの問題に単純に帰する部分も大きい。その意味からは、学習援助活動の中で自己表現訓練を普遍化させ、日常的な取り組みにしていけることが望まれる。

1990. 7. 7. S短大教育社会学

この授業でものごとく感じたのは、生徒（自分も含めて）（筆者注 生徒でなく学生であることは授業中、何回も言ったが）が受け身の形に慣れすぎているということ。先生に「自由に話してもいいよ」と発言を求められても、何も話せない自分がとても恥ずかしかった。でも、この授業を受けていくうちに、まったく知らない人に話しかけたりするのもイヤじゃなくなったし、知らない人とうちとけることもできるようになった気がします。

1990. 10. 13. S短大社会教育概論

ブレーションミングでは、今まで学校で行ってきた学級会などと違い、思うように発言できた。アイデアを批判されたりすると、つい消極的になってしまう。そういう意味でも、

このブレンストーミングは、学校教育の中でもっと活用されていいと思う。

私が体験してきた話し合いでは、いつもきまって同じような人が発言し、その意見で決まる。ほかの人は面倒くさいから言わなかったり、消極的な人は言いたくも言えなかったりしていた。こんな話し合いでいいのか、と思ってしまう。

1990. 4. 25. T大2部教育学演習

私は学生時代からずっと、司会者や委員長というのは、陽気な性格の特別な人になるものだと思ってきました。ですから私にはずっと縁のないものでした。今日の授業で、司会をすることも、また、イベントの要素をもっており、ポイントを押さえれば、誰にだってできるものなのかなと思いました。

1990. 5. 16. T大2部社会教育概論

(出席ペーパーの) 文章を書くということは、なんて難しいんでしょうか。日頃思っていることや考えたことも、構えてしまっただけで手が動きません。これは、自分では考えたつもりでいても、系統づけができていないイメージだけのものであるからだろうと思いますが。

5 強力な幸福願望と自己の幸せについての懐疑

欲求段階説という低いレベルの欲求については満たされている場合、幸福の実現に関する本人の自己評価の基準は、かなり高いところにおかれることになる。とくに女性の場合は、幸福に対する強い憧れと、それに伴う現状否定の傾向が顕著である。

第1に、個人は集団の中で平均的な成員であればよいという過去の社会システムを克服して、個人に「個の深み」を求めようとする観点からは、この自己評価基準の高度化は歓迎すべきことである。

しかし、第2に、本人の主体的力量が、そのレベルや不成功の体験に耐えられるまでに至っていない場合は、結果的にはかえって疎外の状況を生み出してしまいうことがある。

第3に、欲求段階説を機械的には当てはめることのできない状況が生み出ている。すなわち、モノの豊かな今日にあっても、なお、親の責任による栄養不良症状の子どもがいるわけだが、そういう人にとって、まず食料を、ではなく、まず家族の愛情や自己の社会的認知を、というように高度な欲求の方が切実になっているのである。

第3の視点からいえば、本人の強力な幸福願望や自己の幸せについての懐疑は、恵まれているから、などと他者が本人を評論できる状況ではなく、むしろ、各人の主体性が奪われて、人々が愛情の享受や存在確認をしづらい不幸な状況になっていることの証しともいえる。あるいは、それとの葛藤のプロセスからこそ、現代的な「個の深み」が本人に生まれるという楽天的な観点から、援助のあり方も考えるべきなのかもしれない。

1990. 4.14. S短大教育社会学

私は幸せです。両親もいるし、兄弟もいるし、友だちいるし、彼氏いるし、でも、私の幸せは表面だけかもしれない。もちろん、友だちの目からは、明るくておもしろい人みたいに思われているだろうけど、ちがう……。

私は海が好きです。ダイビングとか、ウインドサーフィン、サーフボードとかやっているときに、幸せかなってかんじ。

だんだん何を書いているのかわからなくなってきた。

1990. 4.18. T大2部社会教育概論

幸せには2通りあるように思う。1つは、お風呂のように、手近で現実になる可能性がとても高いものかしら。でも、お風呂で「ああー、幸せ！」とは思ってみても、私が私の人生に求める本当の幸せってほかにあると思う。それは、もっと大きくて遠く、現実性はお風呂よりぐっと低い。ふつう人々の言う“幸せ”とは、この2つめのもので、それは崇高でもっと理想的なものだって思いたい、という気持ちが我々の中にあるのではないか。

1990. 5.16. T大2部社会教育概論

この講義でよく「幸せ」ということが出てきますが、個人的にはあまり話題にしてはしくなと思っています。幸せの定義(?)は人によって違うものだし、どんな定義をもっているのも自由だというのが私の考えです。

余談ですが、私は今までに自分で幸せだと感じたことがありません。幸せになりたいとも、あまり思いません。でも、きっと、心のどこかで幸せになりたいと思っているのでしょうね。矛盾！

6 学校教育への怨恨

自らの受けてきた学校教育への怨恨には大きなものがある。しかし、それが本人の深みに昇華されているかというと、残念ながらそうではない。反面教師だけでは、人間は成長できないということであろう。

オープン・エデュケーションなどによって、オルターナティブな教育も存在しうるのだということ認識できるチャンスを提供しないと、本人は、制度化されたものへの単純な全否定や敗北主義からいつまでたっても抜け出せないことになる。もちろん、その状態のまま、現代社会で「個の深み」を実現することなどは、望むべくもない。

1990. 4.14. S短大教育社会学

高校のとき、職員室や体育教習室 etc の生ゴミ片付けと食器洗いが嫌だった！ 何で先生たちの出した生ゴミを私たちが片付けるのー？ くさいポリバケツを洗ったり、お弁当箱を洗わされたこともあった。

1990. 4. 14. S 短大教育社会学

私が出た高校もそうなのだが、授業が受験のためだけのものになっている。高校3年になって泣かないために……、という理由で。

1990. 4. 14. S 短大教育社会学

私にとっての学校教育。プレッシャーは、先生の差別、テストの敵がい心、おしつけ。学校教育のなかで一番いやだったのが、比較されることだった。幼稚園2年、小学校6年、中学校3年、高校3年、そして大学、の合計15年も、いやなのに通い続けている私は何なのだろうか。

1990. 12. 5. T大2部社会教育概論

最近、ふとすることがある。私は大学に何をしに来たのか、と。たしかに教員の資格を取得すれば、職場での私の立場は有利になる。しかし、私が本当に知りたかったことは、教師が生徒にどこまで干渉しているのか、教師が自分の尺度で生徒を評価しているのか、などであった。

たとえば、入試を例にとっても、学力が基準に達していない、生活面に問題がある、などの理由で合否を決定する。もしかしら、この合否で、その人の人生が左右されるかもしれないのに、わりと簡単に合否を分けていく。そして、その責任は、すべて受験生にある。合否を決定する側の権利（ちょっと大げさ）とは、何なのだろうか。同じ人間なのに、切り捨てる側と切り捨てられる側の差があるのは、なぜなのだろうか。

また、生活指導という名のもと、言いたくもない小言を生徒に言わなければならない。その基準は自分の考えている「社会一般で言われていること」である。時には、きついこと、自分が言われたら自分でもかなり傷つくだろうと思われる言葉で叱りつけてみたりする。このようなことを教師は生徒にしてよいのだろうか。

それらの答えは未だに見つからない。

7 学習に対する強迫観念的な態度

学習者、とくに学生や研修受講者などには、講義は黙って聞いているものという思い込みが強い。静かにすること自体は、それはそれでかまわないのだが、黙って聞いているだけでそのまま有益な学習になるという態度は、過度に（適度なら問題はない）依存的な学習態度としてとらえるべきであろう。

また、正答の与えられない問題を考えさせられたり、学習者の思考が混乱するような話題展開をしたり、学習者側が何かを発表させられたりすることを、いやがったり、まともな講義（学習）ではないと批判したりする学習者もいる。

これらは、すべて「学習とはこうあるものだ」という思い込みを、本人が意識しないままに固定化させてしまった結果であると考えられる。そこでとらえられている学習の姿も、本人の

主体的な思考作用をあまり重視しない受動的な行為としての「学習」である。

「学習とはこうあるものだ」という思い込みが、強迫観念のように本人の学習を縛っているのである。しかも、その思い込み自体が、根拠のない間違っただけである。なぜなら、本来、学習とは個人的事象だからである。

しかし、本人は、そういう自己の依存的学習態度を見直す機会に接すれば、苦しみながらもそれなりに自らの認知構造を変容させる可能性をもっている。そのための機会が、一つには講義内容の改革でなければならないし、出席ペーパーなどのシステムの導入なのでもある。

本人の主体的な学習（全生活の中での）と成長なくしては、「個の深み」の獲得は期待できない。

ただし、出席ペーパーの中には、大いに的を射た批判もあり、それはそれで、教師側の教育方法の改善に役立っている。

1990. 9. 19. T大2部教育学演習

先生の話すことは、一つひとつ意味があって楽しいと思うのですが、ただ1つ疑問に思うことは、この時間の意味。「この時間は何をするのだろうか」。よくわからない。

1991. 1. 23. T大2部教育学演習

いつも型にはまった授業で教育され、1つの意見にもマニュアルがあるのではないかと無意識に思っていた自分にとって、このゼミはとても自信のもてる所になりました。どんな意見でも自分の意見としての自信がついたようです。

1990. 4. 11. T大2部社会教育概論

初めての講義だが、前半は疲れがつのってきて、受講をやめようかと思った。それは、話が飛ぶ独特の話し方よりも、相手からのフィードバックがないまま内向して自分の中で情報を処理するという今までの講義の受け方に慣れきってしまったせいだと思う。一回も睡魔と闘う機会がなかったのも、また、不思議な気がしている。

曖昧さに耐えるというのは非常に強さがある。牽せになるためには（先生の講義を受けるときにも？）、通らなければならない試練だ。

1990. 6. 27. T大2部社会教育概論

定番化した授業に慣れきった自分としては、そのイメージを崩して、今日の授業（ハドリング）のように、即席のグループの中で自分をさらけだして、自分に閉じ込められてもいい事象となると、気分的に良くない状態になる。

ディベートやら、討論やら、アメリカから輸入した授業形態の効用は何なのでしょう。沈黙は金なり、ということわざは、昔のことなのか。あえて自分をさらけ出す必要はないのではない。余計なことをべらべらしゃべるなんて……。

1990. 7. 4. T大2部社会教育概論

もうだいぶ歳をとってきたのに、まだまだ受け身的なのです。それで、自分がこの授業を

学んだ気である。でも、それでも、安心したい自分がいるのでしょうね。情けない！ 受け身というのは楽なんです。

でも、仕事では逆の立場で、受け身ではなく自らの学習が必要なんだ、なーんて言っている私もいる。本当に矛盾している。

8 集団への帰属に対する拒否感

現代社会における人間疎外を克服する手段として、一般的な議論としては、ややもすると集団への帰属感の回復の必要を安易に結論づけがちである。しかし、そういうことでは、せっかく「個の深み」に向かいつつあった個人が疎外されてしまう。

ネットワーク型社会においては、集団に対する個人の依存はむしろ障害になるのであるから、本人の帰属に対する拒否感をむしろ自覚化させることによって、自立的な生き方の中にある孤独に耐えるような主体性を呼び起こし、それでも潜在的に存在するであろう自己の集団への帰属の欲求と真正面から対面させる必要がある。

その上でこそ、ネットワーク型社会が個人に求めるであろう自立と依存を両立できる主体性の形成を促すことができるのである。

1990. 4. 21. S 短大教育社会学

このまえ、中学生の時に書いた文集を、なんとなくパラパラと読み返してみました。そこには、「まとまりのあるクラス」とか「団結しているクラス」とかいう言葉が、何度か出てきました。あの頃は、一つにまとまっていることがいいことのように漠然と思っていたけれど、今はそうは思いません。みんなの意思や考えがまとまっていたのではなくて、どちらかというと、誰かの考えにまとめられていたという感じがするからです。

1991. 1. 12. S 短大教育社会学

はっきり言って、集団は苦手です。集団の中にいると、本当の自分が出せないからです。たとえ、その中に溶け込むことができて、つまらないと思うときがほとんどだし、自分を出したいのだけれど、人が多いと消極的になってしまいます。だから、友だちと2人か、1人でいるというパターンが多いです。別に集団がきらいというわけではありません。自分の立場をどうおいたらいかわからないので、苦手ということになってしまうのです。

自分で分析してみると、1人か2人のときは自分の自由がきく、というのがあるから、自分をさらけだしているような気がします。ただ、たんに、わがままなだけでしょうか。社会に出たら苦勞するかも。

1990. 10. 24. T 大2部社会教育概論

「個の深み」では、ネットワークを肯定し、異質のものと喜んで交流することを質の良い個人主義としている。ここでは、他との交流に絶対的価値をおいている。“交流できる個”

は肯定しているが、「交流したくない個」の存在をどう考えているのだろうか。

出席ペーパーを書かない人がいることに対して、「自己の個の表現の抑制」、「実効主義」などと否定的にとらえられていたが、社会教育関係者の中には、個というものは表現されなければならないという思い込みが、つねにあるように思われる。社会教育関係の人々は、根底に、「人は交流しなければならない」という思い込みがある。青年の家の職員は朝礼を好み、西村氏は出席ペーパーにBBSが少ないとなげく。

9 ユーモア、ヒューマニズム

とくにユーモアについては、学校教育の教育課程の中では、科目としての道徳や国語の中でのごく一部を除いて、評価の対象になることが少ない。しかし、「個の深み」というものがアカデミックな側面に限定されるべき根拠は、まったくないのである。むしろ、人間の全体性の中に、広く幸福追求の基盤としての「個の深み」が見いだされるととらえるべきであろう。ここでは、ユーモアやヒューマニズムは、重要な要素である。それは、本来の意味での「教養」としてとらえることもできる。

したがって、出席ペーパーは、それらの「教養」の本人の深さ、またはその可能性を、自己認識させるための有効な道具になりうる。

1990. 4. 14. S短大教育社会学

私が動物の中で一番かわいと思うのはペンギンです。

この前、上野動物園に行って遊んできたけど、動物はねてるだけだったんで、お金払ってんだから少しは動けーと思ったら、ペンギンは泳いでいてくれて、すごーくかわいかったですよ！

1990. 5. 19. S短大教育社会学

公民館のビデオで、ママさんコーラスの場面のお母さんたちの表情がとても良かった。歌の好きな人たちが集まり、その人たちの歌声がコーラスになる。技術面では不足していることもあると思うが、やっぱり歌の好きな人たちが歌う歌は、心がこもっていて、こっちまで顔がにこやかになってくる。

義務だけの歌になりがちなこの頃の私は、いう歌が好きだという気持ちを忘れていたような気がする。

10 山アラシのジレンマ

現代人の対人関係は、自分や他人がお互いに傷つけ合わないよう、距離を置きがちである。これを批判することもできるが、「人間」の言葉が示すとおり、一定の「間」（ま）は基本的に

は望ましいのである。

問題は、間をなくすことではなくて、主体が真に欲する関係を自己認識し、それに応じた間の取り方を技術的な面から修得することである。

1990. 5.12. S 短大教育社会学

今回、「おしゃべり症候群」のことが話題の一つとして取り上げられましたが、これは本
当に考えさせられました。

私もおしゃべりはよくするほうなんですけど、やっぱりそれは話したいという自分の意思
よりも、むしろ、沈黙に耐えられない自分の弱さのほうが強いのだと思うんです。もちろん、
自分が話したいときに話したいことを話すのは人間の本能でしょう。でも、沈黙が怖くてむ
りに話してしまうのも、人間の本能だと思います。私も例にもれず、やっぱり沈黙を通すこ
とは怖いんです。

1990. 5.26. S 短大教育社会学

私には、全国津々浦々(?)に、文通している友だちがいます。この年になって文通して
いるというのも変かもしれませんが、中には8年越しのつき合いになる人もいて、今ではた
んなる penpal というだけでなく、本当に大切な“話し相手”としておつき合っています。
私の深刻な悩みは、すべてその子たちに託してしまうのです。会ったこともない、まだ見知
らぬ人たちですが、Tel なんかで伝えられないもどかしさも手紙を書くことによって解消さ
らるので、私は“書くこと”が好きです(どんなことでも)。

周りの友だちや mito san 等を信用していない訳ではないのですが、身近にいる人だとか
えて自分の弱味を見せる気がして、それが嫌でどうしても本心がさらけ出せません。これ
って周囲の人間に対して“カラ”を作ってることになるんですよね、きっと。mito san も
パソコン通信をやっていると、なんだかそういう対人関係のギャップ(?)みたいなを感じ
ませんか?

1990. 6.20. T大2部社会教育概論

最近、社会教育について(社会教育とよべないものも含めて)、いろんなことを考えます。
もし、自分が社会教育に参加することになったら、そうしようと思ったら、何を一番望むだ
ろうか、と。仕事や職場の人づきあいなどで、すでに疲れているところへもってきて、人と
人とのつながりを求める心の余裕があるのかな、などと考えてしまいます。

1990. 9.26. T大2部社会教育概論

何もかも相手にさらけだしてしまうのも、なんだかつまらない恋愛になってしまいそうで。
自分の悲しみも淋しさも、相手の悲しみも淋しさも、共有できないし、教えないものね。自
分でしか。

11 共感的理解の能力

他者への共感は、同感と違って、困難を極める。自分に引きつけて、自分の心で、しかし、自分の心の枠組（準拠枠）からではなく、他者の気持ちを理解しなければならない。

この能力は、教員などに求められるのはもちろんであるが、与えられた枠組ではなく、自らの主体的な意思で他者と交流するために、すべての人間に普遍的に必要な一種の「生きる力」と見ることができる。

その能力の養成は、基本的には本人が意識的にそういう態度をとることによってこそ可能になる。出席ペーパーに書くことによって、自己の内なるノイズが顕在化されて意識下に置かれるので、共感的態度を本人が自覚的にとるためには、むしろ有効である。

1990.11.10. S短大社会教育概論

（登校拒否に関するルポ番組を見て）テレビでも言っていたように、“待つ”ということ、これが本当に大切なんだと思う。テレビに出ていた子どもたちは、なんだか元気そうに見えたけれども、そうなるまでは、すごく苦しい気持ちだったのだらうと思う。

1990.12. 8. S短大社会教育概論

今日のビデオ「障害者のための絵画教室」は、とても感動しました。今までは、障害者を見かけると、かわいそうだなと思ったり、電車の中で大声で叫ぶのを見たり、話しかけられたりすると、少しいやだなと思ったりしていたのが恥ずかしくなりました。私はすごく健康なのに、わがままや不満をいっぱい言っているだけなんて、自立していないなと反省しました。

1990. 6.13. T大2部社会教育概論

（「驚異の小宇宙・人体」を見て）まるで、自分の中、人間の中の他者や他の存在に気づかされた思いがする。そして、この講義をとっているみんなと共有した時間、共有体験というのだろうか。一番後ろに座っていたので、そんなことも感じた。そして、それを前提として、このVTRに対する不思議な親近感、「これが学ぶということなのか」というような感じをもった。

1990.11.14. T大2部社会教育概論

（登校拒否に関するルポ番組を見て）私自身、彼らと同じようなことを経験したからということもあるが、今日のビデオには、非常に強く共感した。あの頃のつらさというのは、とても口で表せるものではなく、今日見てもつらかった。

しかし、直接、彼らと会って話しても、私の場合は、それほど共感の気持ちはわいてこない。ビジュアルや本などの二次的なもののほうが共感できる。どうしてだろうか。

1990.11.28. T大2部社会教育概論

子どもの頃から、人の気持ちがわかるという人に対して、反感のようなものを持っていた。というのも、相手を理解したいと思いつつも、私という個人の目加わることで、相手をゆがんで理解しているのではないかと思っていたからです。

私の場合、共感的理解が下手なので、簡単な言葉で相手の気持ちを表現して、なるべくその言葉が相手の気持ちに近くなるように確認しています。

1990.12. 5. T大2部社会教育概論

私はつね日頃から、他人の気持ちをわかることはできないと思っています。私の仕事は障害者と言われている人々と接して、その人々を援助していくような内容のものですが、障害をもった人々の気持ちがよくわかるかといえば、答えはNOです。私は五体満足ですし、その他いろいろと考えあわせても、彼らの気持ちがわかるなどとは思えません。彼らも、私のような小娘に自分たちの言葉にしがれないようなさまざまな気持ちをわかってもらおうとは思っていないのではないかと思います。

大切なことは、わかった気になってしまわないことであり、相手を否定しないことであり、相手の気持ちを想像する努力をすることであると思います。これが共感的理解ということにつながると思います。どうでしょう。

12 ヒエラルキーへの抵抗、正義感

ヒエラルキーにおける個の疎外については、現代の若者といえどもかなり抵抗感をもっている。しかし、それが主体的な批判になっているかというそうではない。無力感、劣等感、人間の可能性への不信、効率至上主義、成績至上主義などによって、その活力が削がれている。

また、ネットワークを形成するためには、ヒエラルキーに抵抗して主体性を発揮する新しい「自立」とともに、他の人間と相互主体的に関係を結び連携する新しい「依存」の能力も求められる。

1990. 9. 26. T大2部社会教育概論

私が仕事で後輩たちの記録物を見るとき、必ず評価が前提になっているので、なんだか純粋な目で見れない。すごく苦痛な作業です。純粋な気持ちになれない私に問題があるのはわかっているけど、このプレッシャーにはたえられない。

1990.11.28. T大2部社会教育概論

(学習情報センターのビデオを)今日は、私の気分で(気分ですみません、でもそうすから)非共感的に見ていました。センターを訪問したアナウンサーが、「これは有難い!」「うーん、有難いことですね」と、有難いを連発していましたが、「何がそんなに有難いのよ!」と反感を持てしまいました。

1990.12. 5. T大2部社会教育概論

組織の内側においても、私は主体的でいるように努力しようと思いました。私だけリズムの先端になってしまおうと。それで上司からのウケが悪くなったっていいんじゃないかということです。だけど、自分勝手にならないように、ひとりよがりにならないように、いつも自分でアンテナをめぐらして、自分で考えて、私はそうは思わない、ということもちゃんと聞いて、その上で、結論を出していければと思います。

これはとってもたいへんなことだと思います。でも、このことができなかったとしても、こういう心がまえでいたいと思いました。

13 ボランティア意識の新たな萌芽

無気力、無関心と評されているはずの若者の中に、ボランティア志向が強く表れることがあることについて、われわれはどう解釈すればよいか。それは、若者が、他者から継続的に組織化されることを今までの厭な体験から嫌っているだけで、自発的に行う生涯学習などの形でなら活動に積極的に参加する可能性があるということであるといえよう。

そして、われわれが最近のボランティア活動を見る場合、奉仕による単純な満足感の欲求ではなく、実現困難な自分の個をなんとか実現したいという切実な潜在的欲求から発しているという深い見方が大切であろう。

「個は他者に関わることによって、より深まる」というテーゼが活動の目的の最高位に置かれるような、新しいボランティア意識が台頭していると考えられる。

1990. 5. 19. S 短大教育社会学

私の町の公民館は、看板がなければ、はったて小屋といってもわからないほど、粗末でおんぼろです。こう書くといささか大げさですが、それでもVTRで見た立派な公民館に比べたら、とんでもなくボロです。そんなボロでも、そこに集まってくる人たちの心はとても暖かく、田舎者のパワーが感じられて、私のとても好きな場所でした。

小さい頃からピアノをやっていたいなければ、その場の状況に流されやすい私は、間違いなくボランティアの道を選んでいただでしょう。それほど、ボロに集まる人々の心のふれ合いは優しく、そしてなごやかだったのです。

音楽の道に進んでしまった今では、ボランティアに徹することなどかなわぬ夢となってしまいましたが、もし、音楽の仕事に就いても、その仕事を生かして、心優しい人々につくそうと思うのです。

1990. 5. 9. T 大2部社会教育概論

(あるドラマの)「世界中の人がみんな幸せになれば、自分も幸せになる」と言って、孤児院で働くシーンが、とても嘘っぽく思えました。自己犠牲に酔っているような気がしたのです。「みんなが幸せになるために、歯をくいしばってがんばるんだ」ではなく、「孤児院の

仕事が楽しくて幸せ」っていう人でないと、みんなの幸せなんて願っちゃいけないと思います。だから、私は「みんなの幸せ」を願う前に「自分の幸せ」をさがそうと思っているのです。先生が言う「幸せをくばる」って、どうしたらいいのだろうか。

1990. 5. 16. T大2部社会教育概論

私は障害者相手の仕事をしています。それを言うとき「えらいのね」という反応が返ってくる人が多いのです。私はいつもその言葉に反発を感じます。私は、この仕事を自分のために選びました。他の誰のためでもありません。私は、一時、真剣に自殺を考えたことがありました。それは、「なぜ生きるのか」という疑問に対し、答えが見つからなかったからです。そして、私がつたどりついた結論が、今の職業です。

生産性を追い求める、そんなラインからはずれて、でも、一生懸命生きています。あの人たちは、どうして生きているのだろう。あの人たちと関わっていけば、私自身の生きている意味もわかってくるんじゃないか。それ考えてすがるような気持ちで選んだのが、今の職業です。私は私のために必死で働いています。そのことで、もし、少しでも助かる人がいるなら、こんなにうれしいことはないと思うのです。

14 アイデンティティの喪失

子どもの頃のいわば仮りのアイデンティティがいったん崩れていく過程を経なければ、その後のアイデンティティの確立はおぼつかないということは、いうまでもない。しかし、そうは言っても、その過程のジグザクの振幅があまりに大きいと、指導者側としては、つい、その揺れをおせっかいにも小さくしてあげようとしてしまいがちである。それを禁欲し、本人が「個の深み」を獲得する方向で、本人のMAZE（前掲拙著参照）につきあうことは、われわれにとって大変難しいことではあるけれども、心がけなければならないことなのである。

また、現代社会においては、成人期以降の人間でさえ、アイデンティティが弱体である場合が多い。それについても、その確立にあわてて取り組むというのではなく、自己のアイデンティティを簡単には認められない個人の深さに着目し、本人の「個の深み」が自覚化されるような支援を考えなければならない。

出席ペーパーによって、本人に自己のアイデンティティの喪失状況を確認してもらうことは、そういう意味をもっている。

1990. 4. 21. S短大教育社会学

きのう、何カ月ぶりかでエンエン泣きました。ふだんでもけっこう涙は出てしまう方なのだけど、きのうは自分でもおどろくぐらい泣けてしまいました。短大1年をなんとなく過ごして、で、2年になってもう進路を決めなければならない。今、どうしたらいいのか、何がしたいのか、すべてわからなくなっていました。

1990. 7. 7. S 短大教育社会学

教育社会学を受けてたくさんの経験ができました。いろいろ、自分自身についても考えた
り悩んだりもできました。なんとなくだけど、自分の中で何かがふっきれたような気もしま
す。なんとなくだけど……。

1990. 5. 9. T 大2 部社会教育概論

何が大切なのかは、自分の価値観の問題だ。私たちの世代は、何が大切で、何が大切じゃ
ないのか、自分で選択していくことがとても下手で苦手だ。私も同じく。

私は自分のことを「先生」という人間がきらいだ。私たちには人生を選択する権利がある。
教師は、人間が人生を選択する上で必要な知識を教えるものであると思います。そんな教師
に私はなりたい。

1990. 9. 26. T 大2 部社会教育概論

いったい自分はどんなことをやりたいのだろうか。もしかしたら、これからずっとやりた
い仕事など見つからなくて、それほどやりたくないことを我慢しながらずっとやって生きて
いくのか、と思うと、どうしようもなく不安になってしまいます。

1990. 12. 12. T 大2 部社会教育概論

自信についての話の中で、一人だけが100点をとることが本当の自信ではないということ
がありましたが、私としては、これを自信として認めたいと思います。なぜかといえば、私
自身にこれと同じ経験があり、その時には自分だけ100点だったので大変自信をつけたこ
とを、今でも印象深く覚えているからです。

（自己受容における）こんな自分でも世の中には必要と思うことは、現実から逃げて自分
の内側の世界にとじこもることであり、自信というよりは、むしろ回避や退行的現象に近い
のではないのでしょうか。

15 自分の過去や他人への気づき

変えられないはずの過去や他人について、変えられないとわかっていながらも悩むのが人間
の実際の変であれば、知っているはずの過去や他人のことを忘れていて、何かのきっかけでや
っと気づくのも、また、その実際の変である。

出席ペーパーに書くという行為によって、それらが不可避免的に客観視されることは、援助者
が思う以上に、本人自らが自己解決の方向に向かう結果につながるものである。

1990. 6. 16. S 短大社会教育概論

私がかがをしちやると、お母さんはきまて「親にもらった体を傷つけるのは親不幸な
んだよ」と言いながら手当をしてくれる。自分の体は自分だけのもののようであって、自分
だけのものではないことがよくわかる。自分を大切にすることは、他人をも大切にできる

ことなのだと思います。「驚異の小宇宙・人体」は、いろいろなことを考えさせられるすばらしいビデオでした。

1990. 12. 12. T大2部社会教育概論

なんで生きてるの、と聞かれたら、生まれちゃったから生きてるとか、生きてるんだから生きてる、と私も言ってしまうそうだけど、死んでしまいたいととても思ったとき、とても悲しくなってしまったことを思い出しました。そのころとってもいやだと思っていた人々（職場でも、家族でも）が、そのときは、私にやさしくしてくれたことや心配してくれたことを思い出して、もし死んでしまったら、そういう人々に会えなくなることをとても悲しく思いました。これ以上はうまく書けませんが、私は、私のためと、私を大切にしてくれる人のために、生きてるんだと思います。

1991. 1. 16. T大2部社会教育概論

この時間内に、このペーパーを書くに当たって、いろいろなことを考えました。職場でのこと、人間関係のこと、学校のこと。入院していた時には、病院での出来事なども友だちに届けてもらいました。授業中にこんなことばかり考えている時は、ほかにはなかったです。

16 自分自身への気づき

出席ペーパーを書くことによって得られるもっとも基本的な作用は、自己認知、さらには自己洞察である。それが端的に表れた事例を最後に紹介しておきたい。

1990. 5. 26. S短大教育社会学

彼女（大学の授業をさぼりがちな友だち）自身は、「悪い」とは感じていないようである。私はそのたびにムッとしてしまう。でも、私自身はマイペース型で完璧主義だから、彼女とは根本的に合わないのかもしれない。

しかし！ 彼女は私に不快感を味あわせようとしてこういう行動をしているわけではないのである。その証拠に、私が「今日は姉がいなくて、夕食一人なんだー」というと、「一緒に食べようー」と、誘ってくれた。きのう、フッと思ったが、私がムッとするのは、私にもさぼりたいという気持ちがあるからなのだろうか。

1990. 7. 11. T大2部社会教育概論

（来学期の希望について）「出席ペーパーによるフィードバックシステム」は、私にとってはとても有意義でした。自分が考えていること、書いたことに対して先生からコメントや意見を伺えること、また、他の人たち（同世代の人たち）が、どんなことを考え、どんな生き方をしているか（少し大げさですが）、ということにふれることができること。そして、それについて自分がもう一度、考えることができるというメリットがあったと思います。

今、思えば、今学期の授業では、70分間、次々といろいろなことに驚き、疑問に思い、否

定し、うなずき、考えていたように思います。

1990. 9. 26. T大2部社会教育概論

癌であるということを知らされている彼（患者）は、私たち看護者に対して、すべてのマイナス感情をぶつけてくる。彼の気持ちもわかる。しかし、私も人間。全部をかなぐり捨てて、怒りをぶつけてこられても、それを100%は受けとめられない自分を見つけてしまった。

1990. 10. 31. T大2部社会教育概論

（エゴグラムを作成して）けっこうさめていると思っていたのに、Aが低く、意外でした。職場においては、ほぼAの部分を押し出して行動しているつもりでしたが、今日の設問に対する自分の回答を見てみると、かなりCPとNPの使い分けで自分のやりたいようにやらせてもらっているようだ、と気づきました。

1991. 1. 16. T大2部社会教育概論

（カウンセリングを受けていて）あまりにも客観的に自分を見るようになったため、それが自分だという実感が得られないでいる。自分は確かにいるが、自分が確かに感じているが、それは自分ではないように思う。だから、ある場面を想定して、そのとき自分はどうか、どんなことを思うか、ということは、分析結果からある程度、予想がつく。

ここで問題なのは、その想像された自分に対して、肯定できない。そんなふうに思う自分が好きでないと思う。だからといって、そう思わないようにはできないとも思う。その結果、自分自身が嫌になる。このごろ自己否定が多くなったのは、そのせいだろうかと思う。そして、自分を見つめることが嫌になっている。